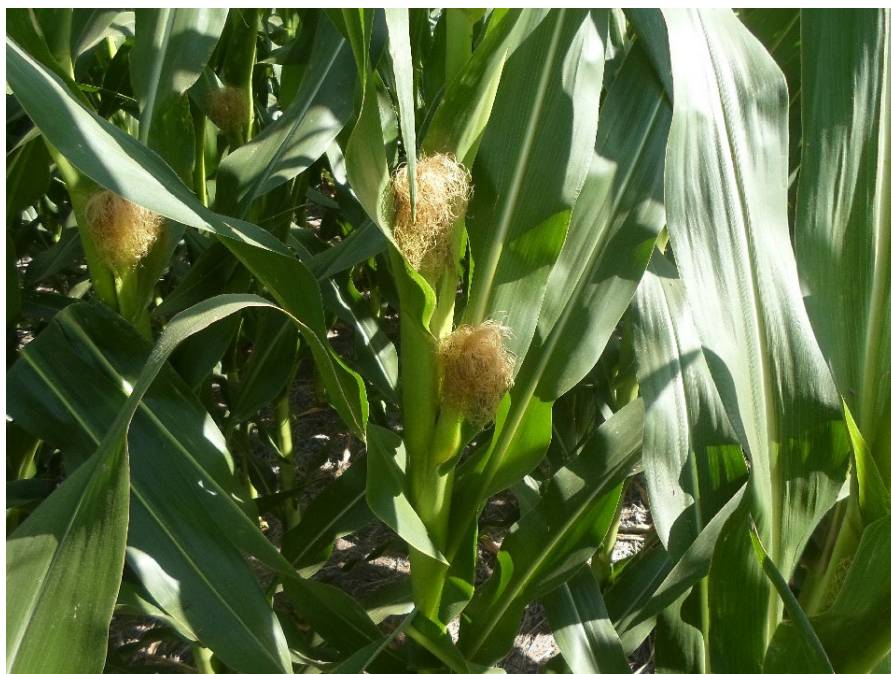


2023 年 3 月

食料安全保障月報

(第 21 号)



令和 5 年 3 月 31 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2023 年 3 月食料安全保障月報（第 21 号）

目 次

概要編

I	2023 年 3 月の主な動き	1
II	2023 年 3 月の穀物等の国際価格の動向	5
III	2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント	5
IV	2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	5
V	今月の注目情報「ロシア・豪州の小麦輸出と輸入国の動向」	6

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	1 0
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	1 1
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	1 2
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	1 4
5	食品小売価格の動向	1 8
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC 提供）	1 9
7	FAO 食料価格指数	2 1

品目別需給編

I 穀物

1	小麦	1
	＜米国＞	2023/24 年度の冬小麦への干ばつの影響を懸念
	＜カナダ＞	2022/23 年度の春小麦・デュラム小麦の品質は良好
	＜豪州＞	生産量は史上最高の 39.0 百万トン
	＜EU27+英国＞	飼料用とうもろこしの代替としての小麦輸入量は上方修正
	＜中国＞	2022 年の小麦輸入は、豪州産が 57.9%を占める
	＜ロシア＞	生産量、輸出量とも前月から上方修正され史上最高
	＜ウクライナ＞	小麦の輸出量は前年度同期比 37.4%減の 1,133.7 万トン
2	とうもろこし	9
	＜米国＞	生産量は収穫面積・単収の減少により減産、輸出減の見通し
	＜ブラジル＞	生産量は史上最高、輸出量は世界第 1 位の見通し
	＜アルゼンチン＞	干ばつにより大幅減産見込み（輸出税継続）
	＜中国＞	生産量、消費量ともに史上最高、輸入量減少の見通し
	＜ウクライナ＞	ロシアによる侵攻により、輸出量は前年度より 13%減
3	コメ	1 5
	＜米国＞	カリフォルニア州の豪雨・豪雪で灌漑用水の貯水水準が上昇
	＜インド＞	2022/23 年度の生産量・消費量とも史上最高の見込み
	＜中国＞	輸入量は史上最高で世界第 1 位

＜タイ＞ 乾季米（全作付面積の約 2 割）は 43%が収穫済み
＜ベトナム＞ 冬春作の生育・収穫が進展

II 油糧種子

大豆・・ 2 1

＜米国＞ 生産量は減産、輸出も減少の見通し

＜ブラジル＞ 生産量、輸出量ともに史上最高の見通し

＜アルゼンチン＞ 干ばつにより大幅減産見込み（輸出税継続）

＜中国＞ 生産量、消費量は史上最高、輸入量も増加見通し

＜カナダ＞ 収穫面積及び単収の増加により増産

（参考 1）本レポートに使用されている各国の穀物年度について（2022/23 年度）・・・ 2 7

（参考 2）単位換算表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 7

特別分析トピック

南米の穀物等生産が世界の需給に与える影響

【利用上の注意】

表紙写真：アルゼンチン サンタフェ州の生育期のとうもろこし（2 月 27 日撮影）
降雨不足のため花が枯れている。アルゼンチンの穀物は
ラニーニャ現象の影響による干ばつで前年度と比べ大幅な減産見通し。

(概要編)

I 2023 年 3 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2022/23 年度の作況については、北半球での収穫はほぼ終了し、南米では生育期から収穫期を迎えている。

品目別にみると、3月の米国農務省（USDA）の需給報告では、小麦については、豪州やロシアの豊作で世界の生産量は前年度を上回る見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、前年3月には過去最高を更新した小麦の国際相場も侵攻前の水準まで戻している。ウクライナの穀物輸出に関する4者合意は3月に再延長されたが、延長期間の合意が得られておらず今後も注視が必要。

とうもろこしについては、ウクライナの減産に加え、米国やEU、アルゼンチンの乾燥等の影響により、世界の生産量が前年度を下回る見通し。一方、大豆については、米国、アルゼンチンは減産も、ブラジルで増産となり、世界全体では前年度を上回る見通し。いずれの品目も旺盛な消費により期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視する必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数（最新値：2月）については、1月から下落（130.6→129.8）しているものの、引き続き高い水準を維持（参考：前年2月の値は141.2、前々年2月の値は116.6）。

海上運賃については、バルチック海運指数（穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数）が、直近5カ年の平均値の9割程の水準で推移。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021年7月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、2023年3月も引き続き適用。

【参考】早期注意段階について（農林水産省HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

米国農務省（USDA）の3月見通しによれば、ウクライナの2022/23年度の小麦の生産量・輸出量は、前月見通しから変更なくそれぞれ2,100万トン（対前年度比36%減）、1,350万トン（同28%減）の見通し。とうもろこしの生産量も前月見通しから変更なく、2,700万トン（同36%減）である一方、輸出量は前月見通しから100万トン上方修正され2,350万トン（同13%減）の見通し（参考1）。

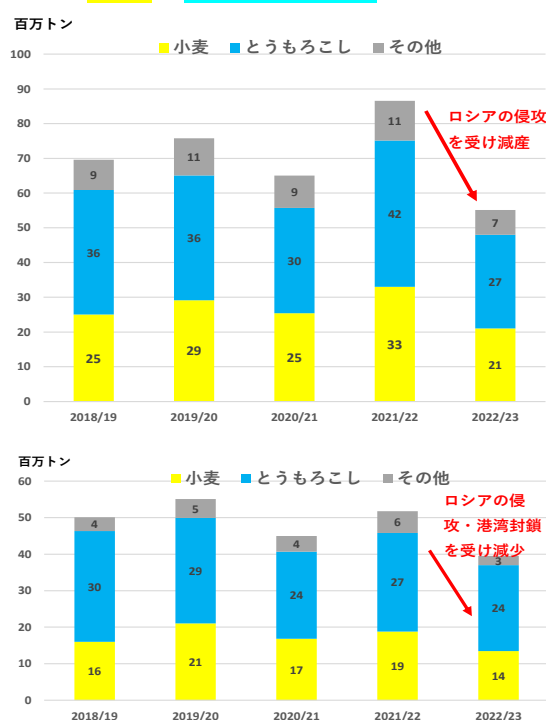
ウクライナ農業政策食料省による3月21日時点の予測によると、冬小麦の作付けがロシアの侵攻前であった2022/23年度と比較して減少したこと等から、2023/24年度の穀物・豆類の作付面積は141万ヘクタール減の1,024万ヘクタール。そのうち、冬小麦は417万ヘクタール（2022/23年度比83万ヘクタール減）、春小麦は29万ヘクタール（同7万ヘクタール増）、とうもろこしは362万ヘクタール（同45万ヘクタール減）がそれぞれ作付け見込み。

同省の3月21日時点の2023/24年度の穀物・豆類の生産量は4,430万トン（2022/23年度5,310万トン）となる見通しで、小麦は1,660万トン（同2,050万トン）、とうもろこしは2,170万トン（同2,560万トン）との見通し。

2022年7月22日の国連、ウクライナ、ロシア、トルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意を受け、前年8月以降、オデーサ港等3港からの輸出が再開され、2022年8月～23年2月累計の輸出量は2,272万トン（うち、とうもろこし1,102万トン、小麦630万トン他）。目的地は中国、スペイン、イタリア等。（参考2）。

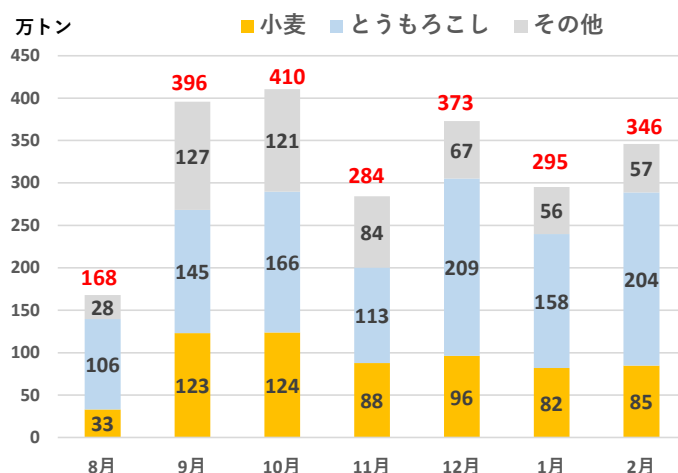
本合意（当初、前年11月18日まで、その後2023年3月18日まで延長）は、さらに3月19日以降延長されたものの、延長期間はウクライナは120日間、ロシアは60日間をそれぞれ主張している。

（参考1）小麦ととうもろこしの生産量（上）、輸出量（下）の推移（年度）



出典：米国農務省「PS&D」（2023.3） 注：その他は他の穀物（大麦等）

（参考2）黒海からの輸出量の推移（月毎）



出典：国連資料（2023.2月末時点）

注：その他はひまわり油・大麦など陸路による輸出を除く。

1 米国の 2023/24 年度のとうもろこし・小麦作付面積は増加見通し

米国農務省は 2 月 23 日・24 日に開催した農業アウトルックフォーラムにおいて、2023/24 の主要作物の作付や需給の予測を公表した。作付面積については、小麦 2,003 万ヘクタール (2022/23 年度比 8.3%増)、とうもろこし 3,683 万ヘクタール (同 2.7%増)、コメ 101.2 万ヘクタール (同 13.0%増) といずれも増加見通しである一方、大豆は据置き (3,541 万ヘクタール) の見通し。小麦、とうもろこし、コメ、大豆いずれも干ばつの影響で単収が低下した 2022/23 年度より上昇する見通し。この結果、生産量は、小麦 5,140 万トン (2022/23 年度比 14.4%増)、とうもろこし 3 億 8,320 万トン (同 9.9%増)、コメ 839 万トン (もみベース 同 15.3%増)、大豆 1 億 2,270 万トン (同 5.5%増) と増加する見通し。

輸出量については、中国向け輸出増を期待するとうもろこしは 5,590 万トンと 2022/23 年度比 14%増の一方、南米やその他の輸出国との競争により、小麦は 2,250 万トン (同 6.5%増)、大豆は 5,510 万トン (同 1.8%増) に留まる見通し。コメは、特に中短粒種の供給が依然としてタイトで価格競争力が弱いものの、318 万トン (同 13.2%増) の見通し。

なお、期末在庫率については、小麦が 30.9%、とうもろこしが 13.0%、コメが 16.3%、大豆が 6.5%といずれも 2022/23 年度より上昇する見通し。

2 アルゼンチンの穀物生産は干ばつで大きく減産

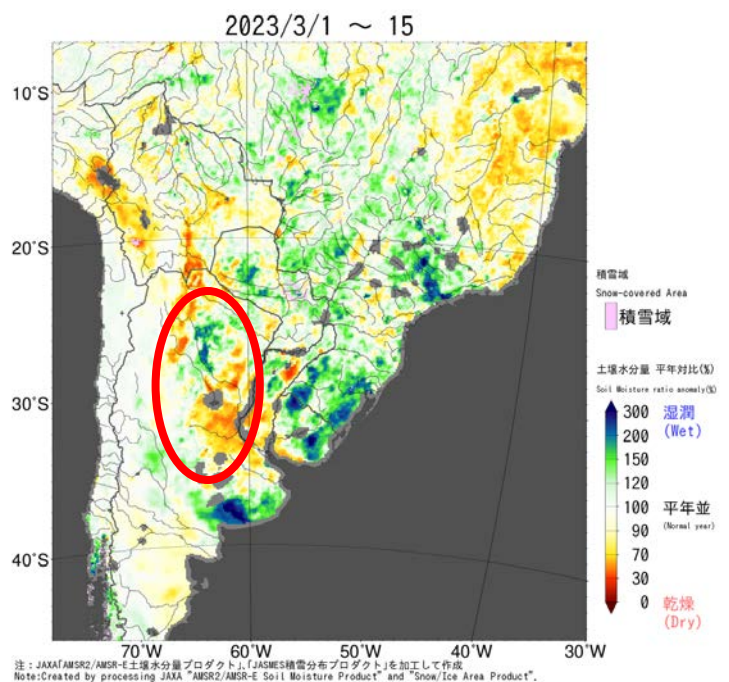
アルゼンチンでは、ラニーニャ現象の影響を受け、60 年に 1 度とも言われる干ばつが継続し、穀物・油糧種子の生産に大きく影響した。ブエノスアイレス穀物取引所週報 (3 月 16 日) によると、生育中のとうもろこしは 3,600 万トン (前年度比 31%減)、大豆は 2,500 万トン (同 44%減) と見込まれている。収穫が終了した小麦は 1,240 万トン (同 43%減)。

アルゼンチン政府は財政赤字の補填のため、大豆最大 33%、とうもろこし 12%などの輸出税を賦課している。これに加えて、国内向けの安定供給を確保するために、例えばとうもろこしについては、2022/23 年度は 2,000 万トンの輸出上限数量を設定している。

なお、アルゼンチン政府は、今般の干ばつ対策として、農業関係者に対し、45 億ドルの融資、7 億 5 千万ドルの減税、運転資金の支援のための 15 億ドルの割引手形を発行するなどの施策を公表した。

(参考) アルゼンチンの土壌水分データ (JASMAI)

3 月に入り降雨があり、3 月前半時点で、一部地域では土壌水分量は平年並みに回復したものの、主産地ではとうもろこし、大豆の単収改善には遅かったとみられる (赤丸)。土壌水分量平年対比+積雪域 (2023 年 3 月前半)



※JASMAI 英語表記画面が 3 月 16 日に表示可能となりました。

<https://jasmai.maff.go.jp/en/>

3 インドは乾季米の増産で史上最高も輸出規制は継続

USDA の 3 月見通しによれば、インドの 2022/23 年度のコメの生産見通しは史上最高の 1 億 3,200 万トン（前年度比 2 % 増）。雨季（カリフ）米は降雨不足で減産も、南部のインド洋沿いで主に作付けされ生育期を迎える乾季（ラビ）米の生産が大幅に増産となり、カリフ米の減産をカバーしたのが要因。

一方、2022/23 年度に熱波の影響で前年度比 5 % 減の 1 億 400 万トンとなった小麦については、2023/24 年度はこれから収穫期を迎える中で、2 月の高温乾燥の影響が懸念されている。

なお、前年 5 月に設定された小麦の輸出禁止や前年 9 月に設定された碎米の輸出禁止のほか精米の一部に賦課された輸出税 20% については、今のところ継続するとみられている。

Ⅱ 2023 年 3 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、2 月末、250 ドル/トン台半ばで推移。3 月に入り、米国産への低調な需要や、黒海経由のウクライナ産穀物輸出を巡る合意の再延長の見通し等から 240 ドル/トン前後に値を下げたものの、同合意の再延長をめぐる不透明感から 260 ドル/トン台前半に値を上げた。その後、18 日の再延長を受けた供給継続予測から値を下げ、3 月下旬現在、250 ドル/トン台後半で推移。

とうもろこしは、2 月末、240 ドル/トン台後半で推移。3 月に入り、米国産の低調な輸出状況や USDA の 3 月需給報告で米国の在庫が輸出量の下方修正により市場予想を上回った一方、アルゼンチンの高温・乾燥による減産懸念や黒海経由のウクライナ産穀物輸出を巡る合意の再延長をめぐる不透明感、3 月下旬の米国産の中国向け輸出成約等から値が小幅に上下した中で、当該合意の再延長を受け、3 月下旬現在、240 ドル/トン台後半で推移。

コメは、2 月末、480 ドル/トン台後半で推移。3 月に入り、新穀（乾季米）の市場への流入継続による供給増加見通しや、来月の更なる新穀流入を見越した海外需要の軟化、バーツ安等により 480 ドル/トン台前半まで値を下げた。その後、バーツ高もあり再び値を上げ、3 月下旬現在、490 ドル/トン台前半で推移。

大豆は、2 月末、540 ドル/トン台後半で推移。3 月に入り、アルゼンチンの高温・乾燥による減産懸念や大豆粕価格の上昇等により、3 月上旬に 560 ドル/トン台半ばに値を上げた。その後、ブラジルの豊作見通しと収穫進展による米国産の輸出減少懸念、原油安等から値を下げ、3 月下旬現在、540 ドル/トン台後半で推移。

（注）小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、米はタイ国家貿易委員会価格

Ⅲ 2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月予測から 880 万トン上方修正され 27.4 億トン。消費量は、前月予測からほとんど変更なく 27.6 億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

期末在庫率は前年度を下回り 27.6%となる見込み（資料 2 参照）。

生産量は、前月予測から、小麦、コメで上方修正、とうもろこしで下方修正され、穀物全体で上方修正され、27.4 億トンの見込み。

消費量は、前月予測から、小麦、コメで上方修正、とうもろこしで下方修正され、穀物全体ではほとんど変更なく、27.6 億トンの見込み。

貿易量は、前月予測から、小麦、コメで上方修正も、とうもろこしで下方修正され、4.8 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.6 億トンと前月予測から上方修正、期末在庫率は、前月予測から上方修正された。

（注：数値は 3 月の USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による）

Ⅳ 2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.3 億トン。消費量は前年度を上回り 6.3 億トンとなり、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫率は前年度を下回り、18.8%となる見込み。

（注：数値は 3 月の USDA 「Oilseeds : World Markets and Trade」による）

V 今月の注目情報：ロシア・豪州の小麦輸出と輸入国の動向

2022/23年度の世界の小麦需給は、ともに史上最高の生産量となったロシアと豪州の小麦輸出が増加し、ウクライナの小麦輸出の減少の輸入分をカバーした状況となっている。そうした中、エジプトは主にロシア産が増え、インドネシアは主に豪州産への依存を高めている。ロシア・豪州の小麦輸出動向と主要小麦輸入国の動向についてまとめた。

注：文中の「2022/23年度」等は穀物年度で、ロシアの小麦は2022年7月から2023年6月。国や作物によって異なる(品目別需給編P. 27 参照)。

1 ロシアの生産・輸出動向

(1) 生産動向

2022/23年度のロシアの穀物生産量は、天候に恵まれ、米国農務省(USDA)の3月見通しでは、1億3,429万トン(クリミアを除く。以下同じ)。うち、小麦については史上最高の9,200万トン(前年度比22%増)、大麦についても2,150万トン(同23%増)となった。特に小麦については単収が3.16トン/ヘクタールと史上最高となる見通し。ロシアの小麦生産は、主に欧州部で栽培される冬小麦とシベリア地域で栽培される春小麦であり、冬小麦が6,800万トンで約7割を占め、春小麦は2,400万トンとなる見通し。

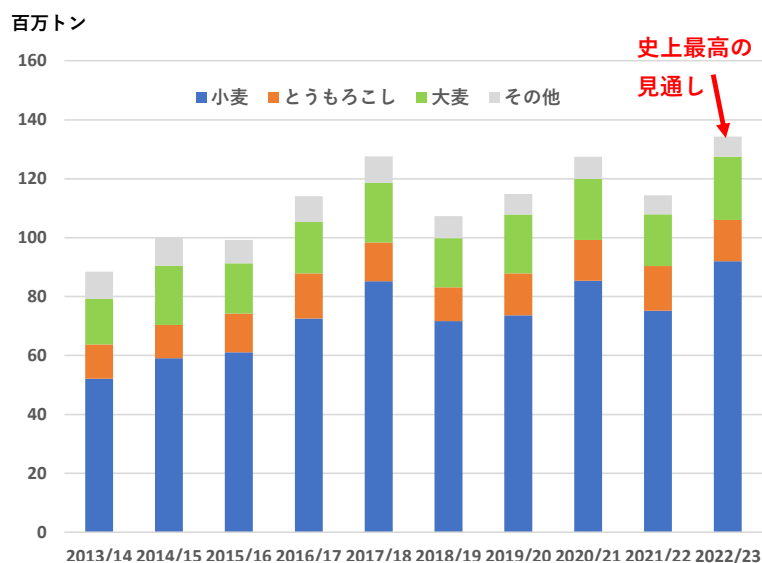
(2) 輸出動向

ロシア政府は、小麦等の穀物輸出に関し、ルール建ての輸出税に加え、本年2月15日から6月30日まで輸出枠を設定している。本年の輸出枠は、小麦、とうもろこし、ライ麦、大麦計で2,550万トン(穀物ごとの区分なし)となっており、前年同時期に設定された穀物輸出枠1,100万トン(小麦800万トン、とうもろこし、大麦、ライ麦計300万トン)を大きく上回る輸出枠が設定されている。

USDAによれば、小麦の輸出量は世界一の4,350万トンが見込まれている。輸出先の内訳は2022年7月～2023年2月でみると、エジプトで、トルコ、カザフスタンの順となっている。輸出量合計では前年同期を上回った。

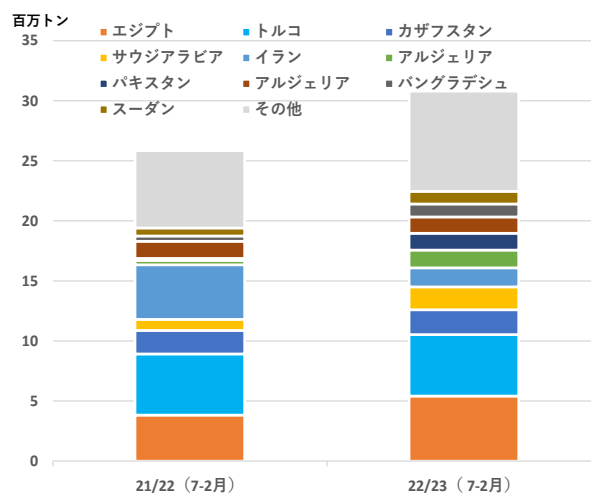
3月上旬のロシアのパトルシェフ農相による発言では、穀物輸出自体は順調であり、2022/23年度は上半期の輸出量が2,800万トン超、下半期は2,500～3,000万トン、通年では5,500～6,000万トンの見込みとされている。

図1 ロシアの穀物の生産量の推移



出典：米国農務省「PS&D」(2023.3)を農林水産省で加工

図2 ロシアの小麦の輸出先(エジプトが1位に)



出典：現地調査会社調べ(2023.3)

2 豪州の生産・輸出動向

(1) 生産動向

2022/23 年度の小麦を含む冬作物について、収穫は終了した。豪州農業資源経済科学局 (ABARES) の「Crop Report」(2023.3.7) によると、冬作の穀物・油糧種子は、生育期の潤沢な降雨に恵まれ、生産量が「7,380 万トンと 3 年連続で史上最高を更新した。中でも、小麦の生産量は、3,920 万トンと史上最高となり、菜種も 830 万トンと史上最高を更新した。特に小麦は西部のウェスタンオーストラリア (WA) 州やサウスオーストラリア州で史上最高を更新した一方、東部のニューサウスウェールズ (NSW) 州では降雨過多により作付けが遅れ、生産量は前年度を下回った。ただし、過去 10 年平均は上回っている。

品質については、ABARES の上記レポートによると、WA 州では春の低温により成熟がゆっくり進んだことで単収は増加したものの、タンパク質含有量が昨年より低い水準となった。

一方、NSW 州では、予想された洪水による品質低下に関し、同州中部及び南部で低タンパク質の飼料用グレードの小麦の生産割合が例年より多くなった一方、同州北部では高タンパク質含有量の小麦が例年と同様の割合で生産された。

(2) 輸出動向

2022/23 年度の小麦輸出については、USDA によれば、3 年連続豊作を受け大幅に増加し、ロシア、EU に次いで 2,850 万トンが見込まれている。

豪州統計局の輸出統計によれば、2022 年の輸出量は 2,879 万トン (対前年比 13% 増)。2021 年の主要輸出先は地理的にも近いインドネシア (493 万トン) が 1 位だったが、2022 年は、中国向け輸出量が倍増し 620 万トン (前年 294 万トン) となり、インドネシア向け輸出量 433 万トンを上回った。中国は、2022 年において、米国やカナダ産の輸出価格が高かったため、輸入を豪州産にシフトしたことが要因と見られる。3 位以下もフィリピン、ベトナムと東南アジア向けが上位を占めている。

図3 豪州の小麦の州別生産量の推移

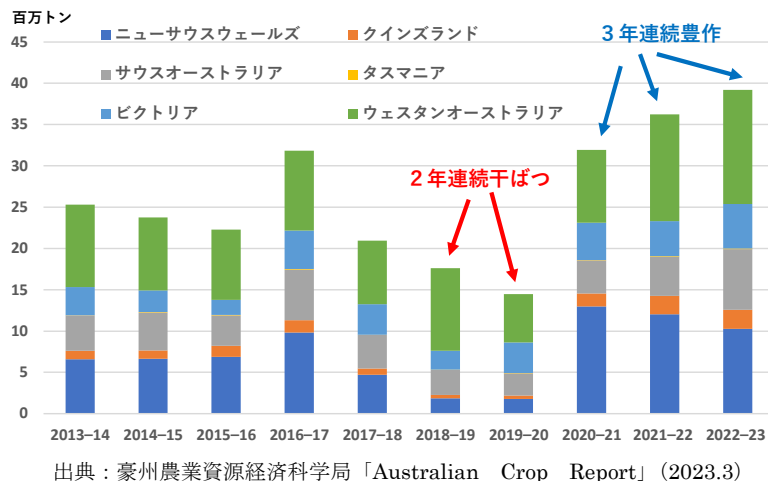
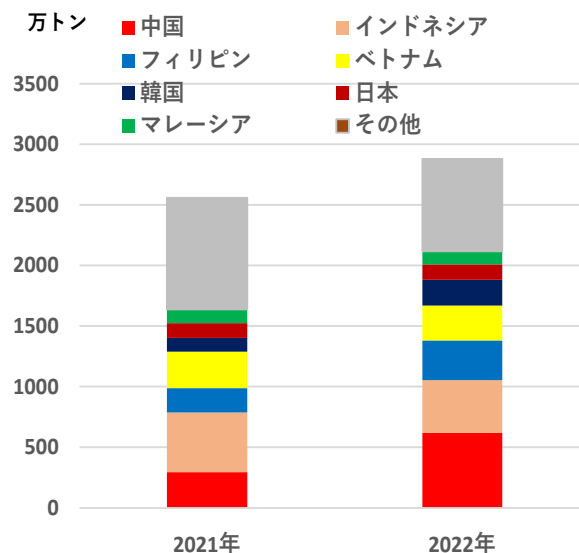


図4 豪州の小麦の輸出先 (2022 年は中国が 1 位に)



3 小麦の国際貿易の状況と輸入国の動向

(1) 輸出国の動向

輸出国では、史上最高の豊作となったロシアと3年連続豊作の豪州の輸出の増加が目立っている。ロシアは、輸出税はあるものの、豊富な供給量を背景に、輸出価格について競争力があること、豪州は中国や東南アジアなど主要輸入国に地理的に近くフレートが安価になることなどが要因とみられる。

他の主要輸出国では、ロシアの侵攻を受けたウクライナと2年連続で生産量が低水準となった米国は減少するものの、小麦への干ばつ被害が少なかったEUや、2021/22年度の干ばつから一転して天候に恵まれ増産となったカナダは輸出が増加する見通し。

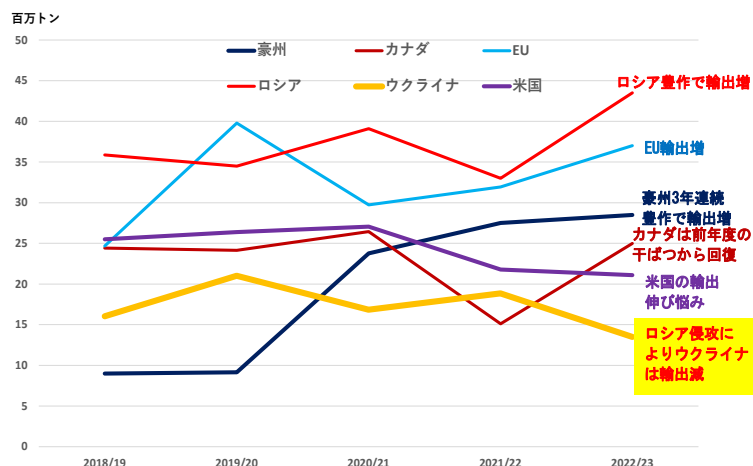
(2) 輸入国の動向

主要輸入国では、USDAの3月見通しによれば、輸入量1位で並ぶエジプト、インドネシアが減少見通しの一方で、3位に並ぶトルコ、中国の輸入が増加している。

エジプトは、小麦輸入の多くをウクライナに依存していたが、前年2月のロシアのウクライナ侵攻以降、一時インド産の輸入を検討した。しかし、5月のインドの輸出規制を受け、ロシア産の輸入を増加させるとともに、国内産の増産政策を進めた。現在、ロシアが加盟しているユーラシア経済同盟とのFTA締結に向けて調整しているとみられる。

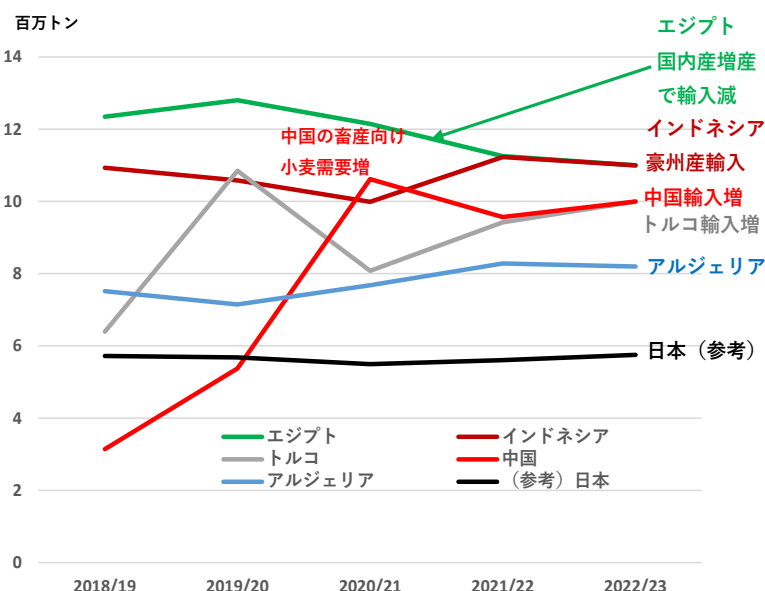
インドネシアは、2022年の小麦輸入に関し、地理的に近い豪州が半分近くのシェアを占めているが、2021年まで300万トン程度輸入していたウクライナ産の輸入が大きく減少し、アルゼンチン産やブラジル産に代替したため、両

図5 主要小麦輸出国の輸出量の推移



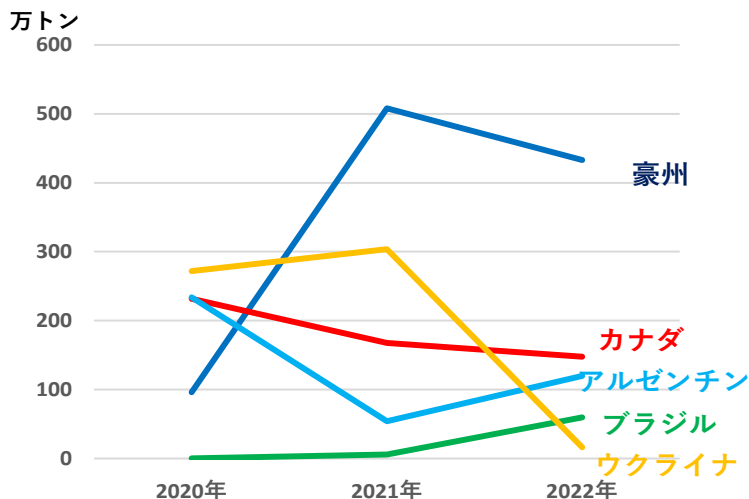
出典：米国農務省「PS&D」(2023.3)を農林水産省で加工

図6 主要小麦輸入国の輸入量の推移（我が国は10位）



出典：米国農務省「PS&D」(2023.3)を農林水産省で加工

図7 インドネシアの輸入先別の小麦輸入量の推移



出典：民間データベース Agri Census (2023.3)を農林水産省で加工

国からの輸入量は 200 万トン弱と増加した。

世界第 3 位の小麦輸入国であるトルコは、エルドアン大統領が黒海穀物イニシアティブの仲介を行い、前年 7 月には合意にこぎつけ、2022/23 年度の小麦輸入は前年度より増加する見通し。なお、USDA の GAIN REPORT (2023 年 1 月) によれば、2022 年 6 月～11 月までの小麦輸入量は前年同期比 1 割減の約 470 万トンとなっている。内訳はロシア産 330 万トン、ウクライナ産 120 万トンと地理的に近い両国からの輸入に大きく依存している。

(2) 今後の動き

小麦を始めとする穀物貿易に大きな影響を与える黒海穀物イニシアティブについては、本年 3 月 18 日に期限を迎え、ウクライナは当初のイニシアティブのテキストどおりの 120 日間の再延長を主張した。

一方、ロシアは、西側諸国の経済制裁によりロシアの穀物や肥料の輸出が支障を受けているとして、改善がない限り 60 日間の延長しか認めないと主張し、この結果、期限が確定しないまま延長されたとみられる。

ロシア側は、ロシア農業銀行の SWIFT への再接続、ロシア産アンモニアのパイプライン経由でのウクライナ・オデーサ港からの輸出などを求めているとされている。ただし、ロシアの好調な小麦輸出状況を見ても、経済制裁の影響がどこまであるのか疑問であるとの見方もある。

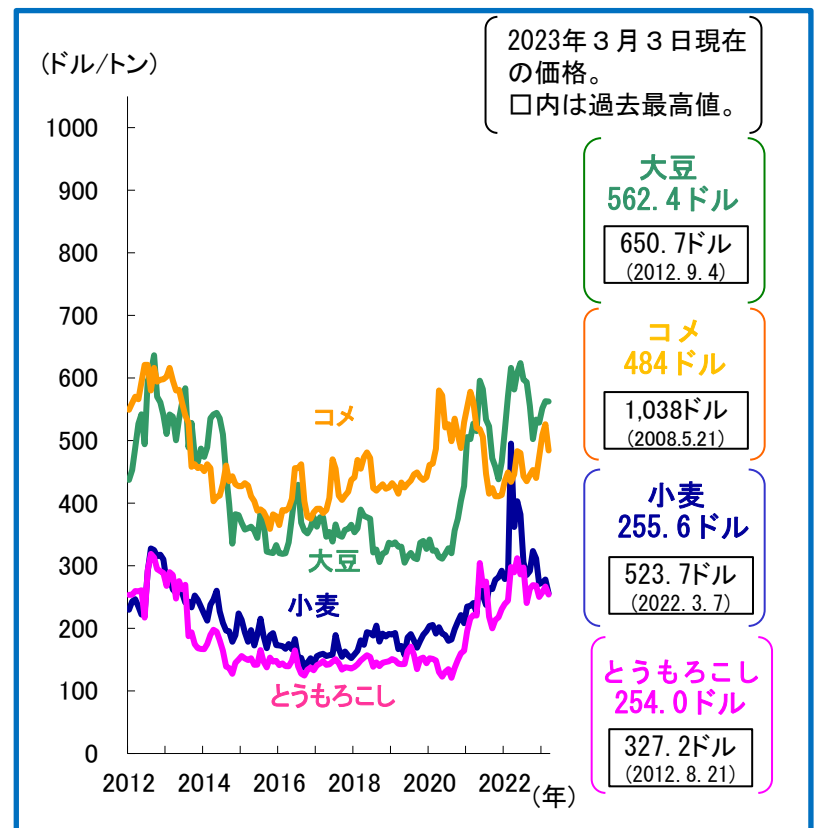
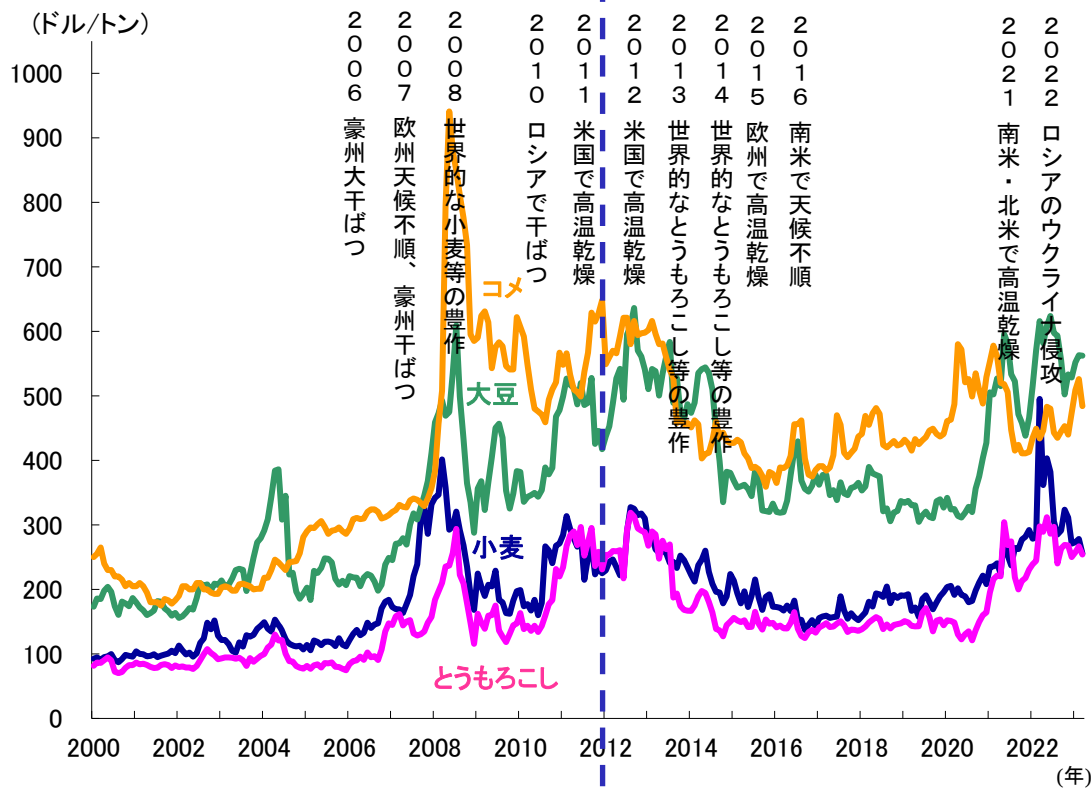
黒海穀物イニシアティブを利用した穀物輸入量が一番多いのは国別では中国であり、侵攻後 1 年経過した本年 2 月 24 日に公表したウクライナ和平案でも黒海穀物イニシアティブへの支持が明記されている。3 月 20 日から 22 日にかけて、中国の習近平国家主席が訪ロし、プーチン大統領と会談した。

また、25 日には、プーチン大統領はトルコのエルドアン大統領と電話会談した。その中で、今後、黒海穀物イニシアティブでロシアの希望が認められず、継続が難しい場合には、ロシアが無償でアフリカの貧困国向けに小麦を輸出することが可能であり、その際、ロシア産小麦をトルコで製粉し、アフリカ諸国向けに輸出したらどうかといった提案があったとみられる。関係各国の今後の動向を含め注視していく必要。

資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降ほぼ横ばいで推移も、2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年に入り、ウクライナ情勢が緊迫化する中、小麦は史上最高値を更新。コメは、2013年以降低下も2020年ベトナムの輸出枠設定や2021年初頭のコンテナ不足等で一時的に上昇。2021年2月半ばから海外需要低迷で低下も、2022年9月以降、パキスタンの洪水やインドの輸出規制を背景に徐々に値を上げ、その後横ばいで推移。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要に加え、ウクライナ情勢により、2008年以前を上回る水準で推移。

□ 穀物等の国際価格の動向



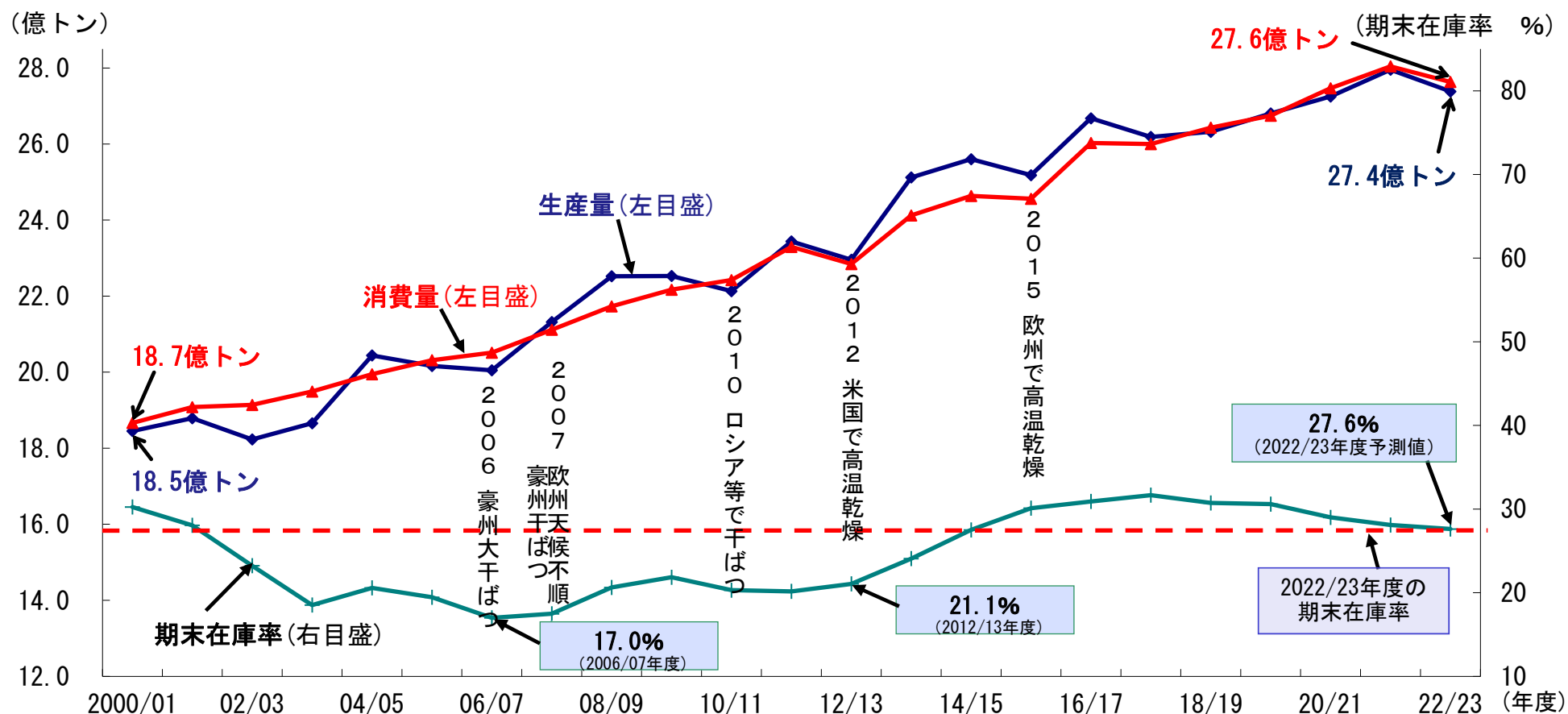
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2022/23年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2022/23年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、前年度より低下し、27.6%。直近の価格高騰年の2012/13年度(21.1%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

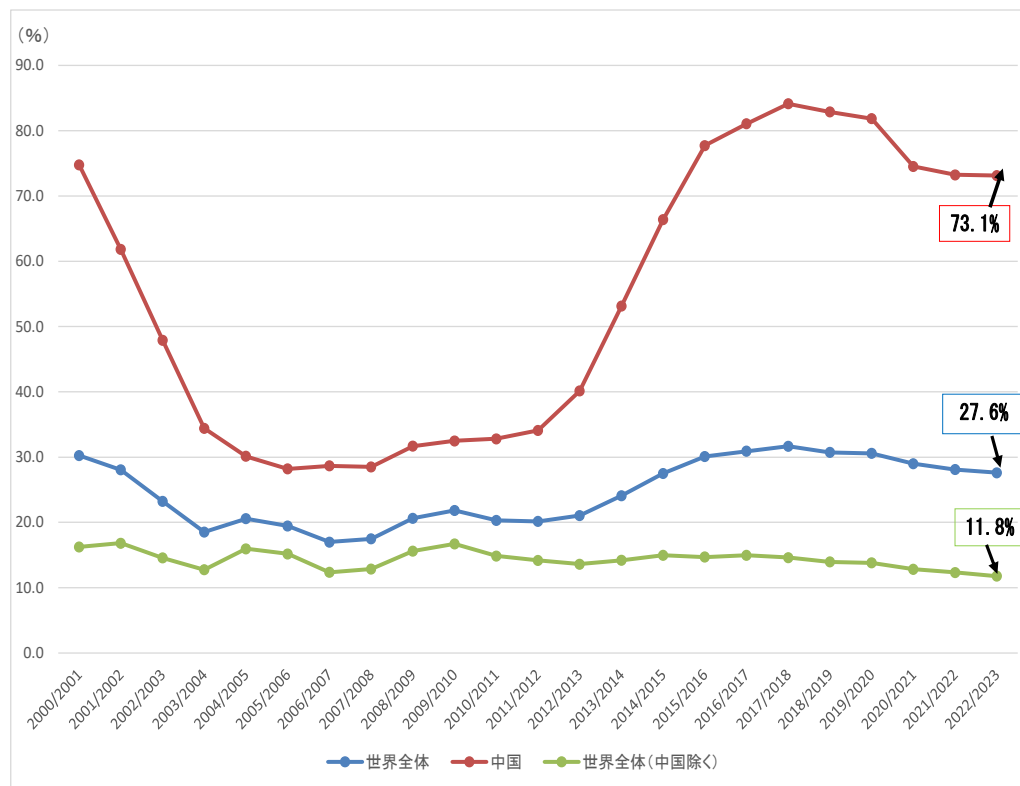


資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(March 2023)、「PS&D」

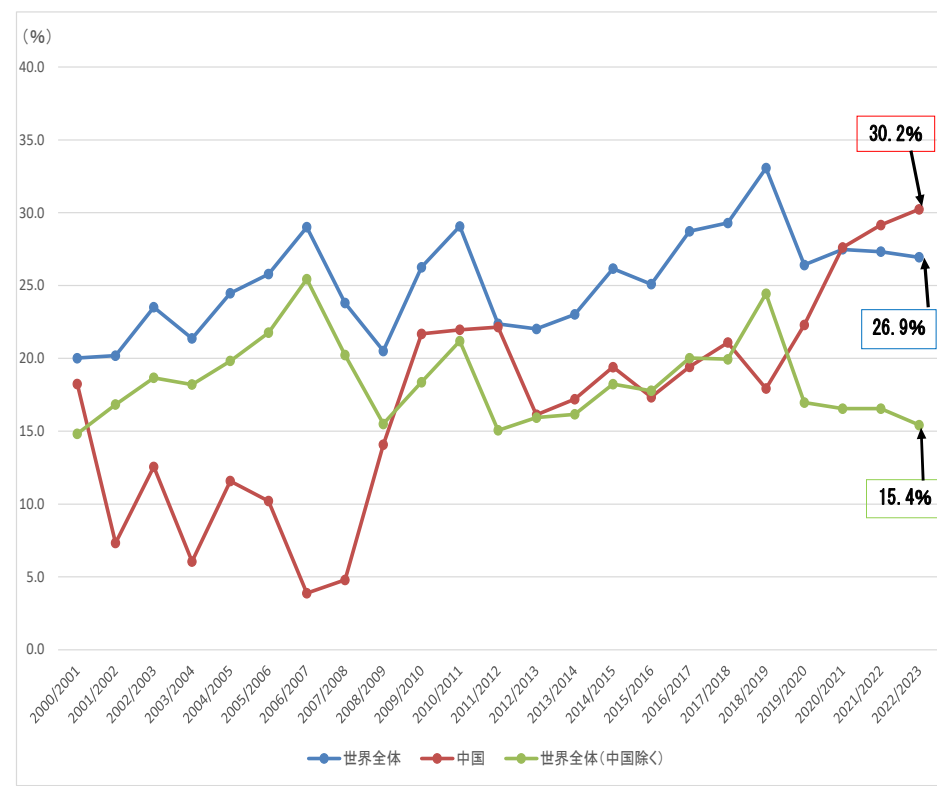
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(March 8, 2023)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

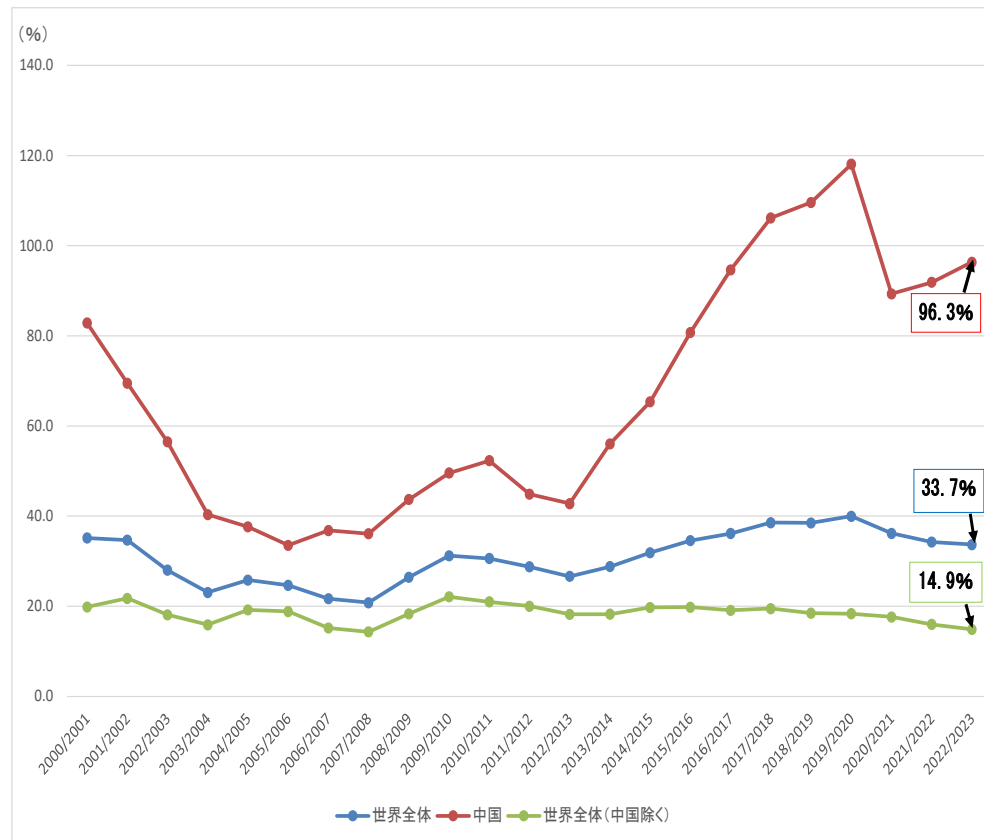
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

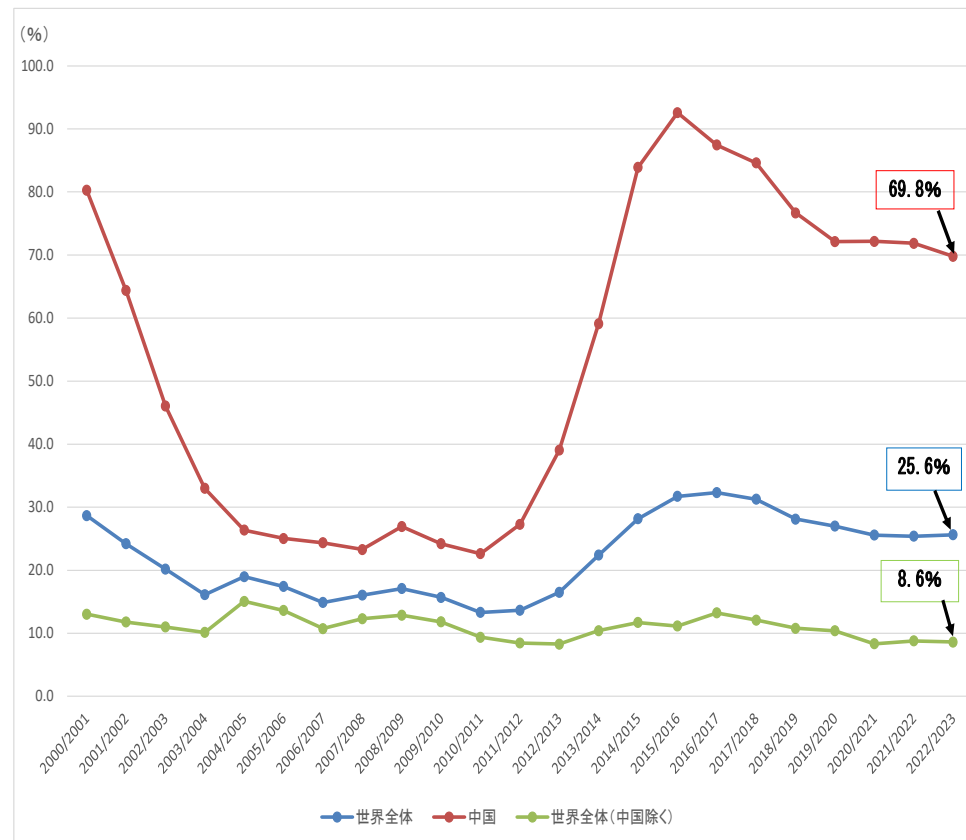
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料：米国農務省「PS&D」(March 8, 2023)

注：1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

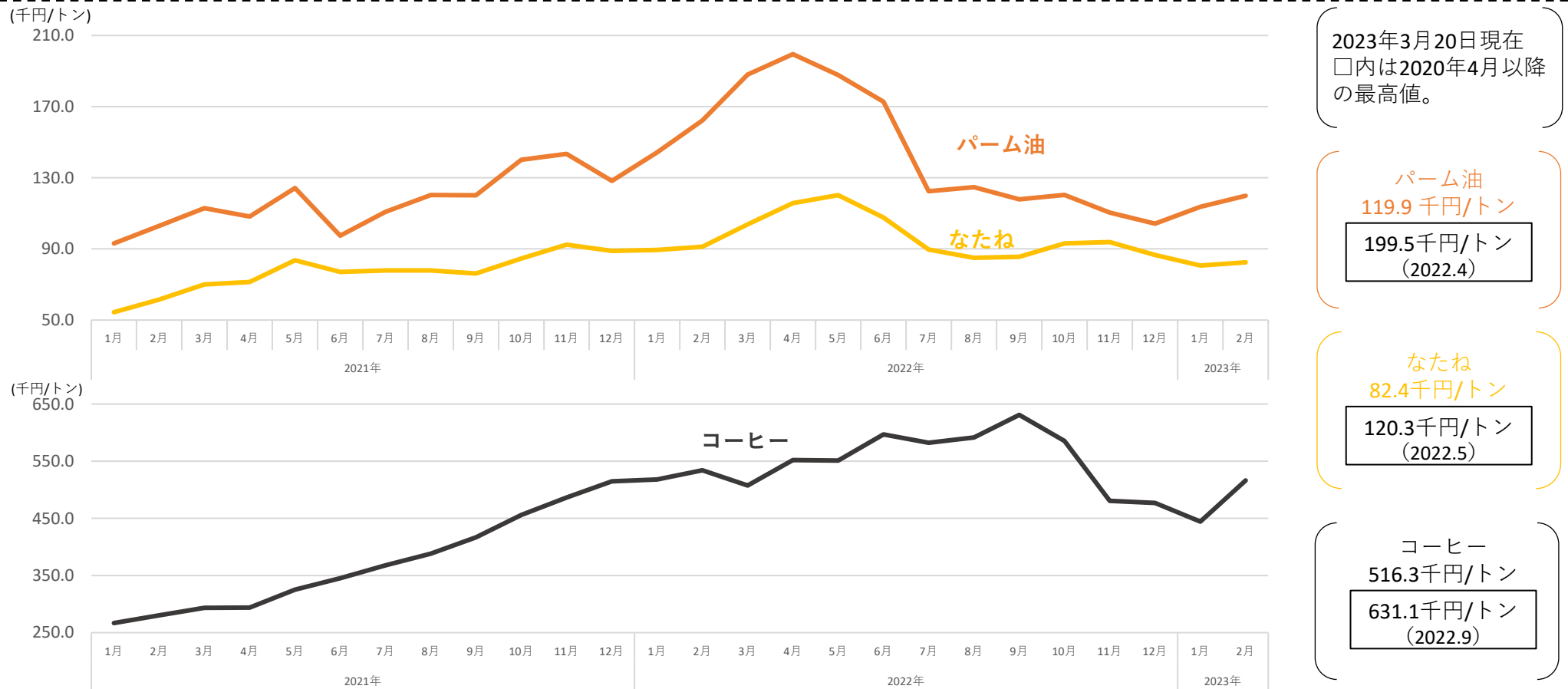
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料４－１ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油について、需要の面では世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加などが市場価格上昇の要因であった。
- 供給面では、なたねについて、主産地であるカナダでは**2021年**に熱波による減産があったが、**2022年**は回復基調から平年並みの収量に近づいた。また、パーム油について、インドネシアの輸出禁止措置（**2022年5月23日解除**）があったが、マレーシアの生産量の増加によって供給不足の懸念が払拭された。いずれも前年の高値からは落ち着きが見られるものの、依然高止まりしている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面ではワクチン接種による経済活動の回復からコーヒー消費量が増加したことにより市場価格が上昇した。その後、消費地のインフレによる景況感の悪化やブラジルでの生産の回復によって市場価格は下降したが、高値が続いている。

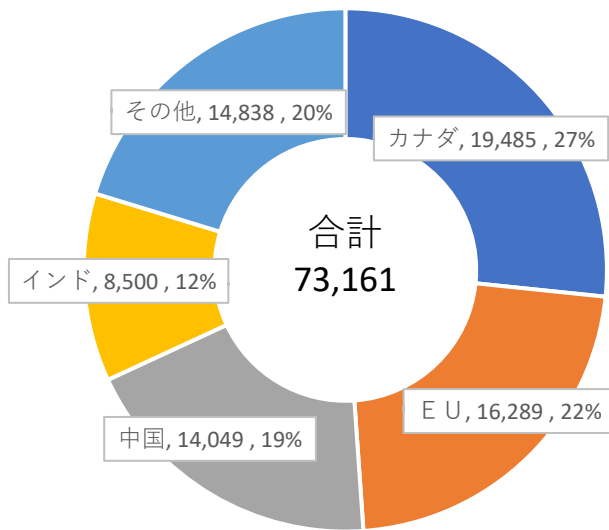


※ なたねの国際価格についてはカナダウィネベグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料４－２ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

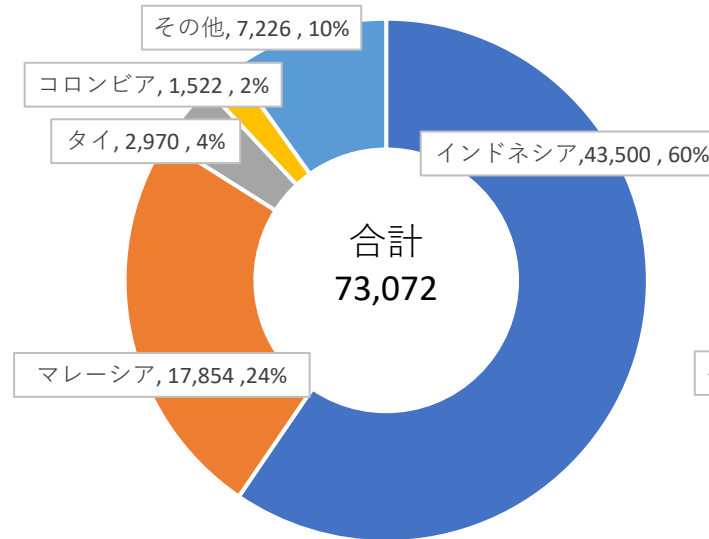
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2020/21）
（単位：千トン）



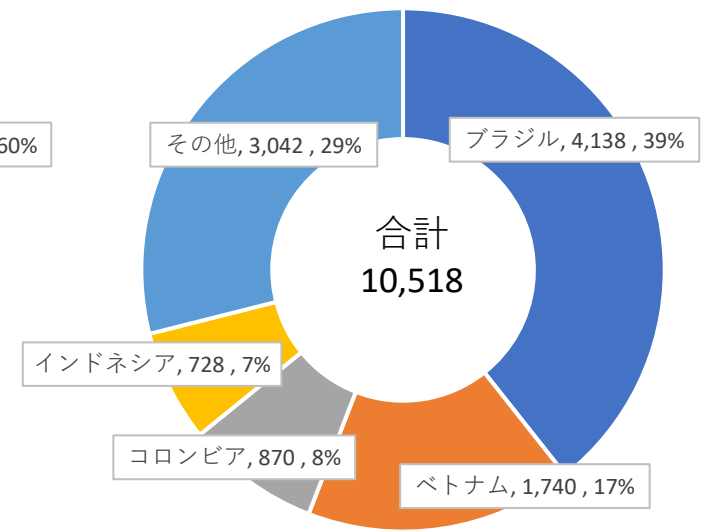
※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

パーム油生産量（2020/21）
（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

コーヒー生産量（2020）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2022年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	1,248	59.4%
オーストラリア	853	40.6%
その他	0	0.0%
合計	2,101	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	500	78.7%
インドネシア	135	21.3%
その他	0	0.0%
合計	635	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	112	28.7%
ベトナム	106	27.2%
コロンビア	47	12.1%
その他	125	32.1%
合計	390	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）

資料４－３ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年												2023年	
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
なたね	34.9	35.2	37.1	37.6	39.2	41.2	42.5	45.0	49.5	54.4	61.5	70.0	71.4	83.6	77.0	77.8	77.9	76.2	84.5	92.4	88.8	89.4	91.2	103.7	115.7	120.3	107.7	89.6	85.0	85.5	93.1	93.8	86.6	80.6	82.4
前月比	99.7	100.9	105.4	101.4	104.2	105.1	103.0	106.1	110.0	109.9	113.0	113.9	101.9	117.1	92.2	101.1	100.0	97.8	111.0	109.3	96.2	100.6	102.0	113.8	111.5	104.0	89.5	83.3	94.8	100.6	108.9	100.8	92.3	93.1	102.2
前年同月比	92.1	98.4	101.8	102.0	109.7	112.6	112.3	119.6	128.9	136.4	162.7	200.1	204.6	237.4	207.6	206.9	198.5	184.9	199.2	205.2	179.3	164.3	148.3	148.1	162.0	143.9	139.8	115.1	109.1	112.3	110.1	101.5	97.5	90.2	90.4

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年												2023年	
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
パーム油	57.1	52.1	60.0	65.4	70.1	75.8	75.5	88.8	91.8	93.1	102.9	112.9	108.2	124.2	97.4	110.8	120.3	120.1	140.1	143.4	128.2	144.2	162.2	188.0	199.5	187.8	172.8	122.4	124.7	117.9	120.4	110.4	104.2	113.7	119.9
前月比	102.1	91.1	115.3	109.0	107.2	108.1	99.6	117.6	103.4	101.4	110.6	109.7	95.9	114.8	78.4	113.8	108.5	99.9	116.6	102.3	89.4	112.5	112.4	115.9	106.1	94.1	92.0	70.9	101.9	94.5	102.1	91.7	94.4	109.1	105.4
前年同月比	100.0	98.9	115.0	129.8	129.3	131.9	135.9	134.6	121.7	117.0	143.8	201.8	189.4	238.6	162.3	169.4	171.5	158.4	185.5	161.5	139.7	155.0	157.5	166.6	184.4	151.2	177.3	110.5	103.7	98.1	85.9	77.0	81.3	78.8	73.9

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料 4－4 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③ コーヒー

単位（千円/トン）

	2020年										2021年												2022年												2023年	
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	
コ ー ヒ ー	257.1	247.9	235.5	241.8	267.7	270.0	244.0	251.9	260.9	266.8	280.2	293.5	293.7	325.2	345.1	367.9	388.1	416.7	455.9	486.3	514.7	517.9	534.1	507.5	552.1	551.2	596.8	582.3	591.6	631.1	585.4	480.6	477.0	444.4	516.3	
前月比	99.5	96.4	95.0	102.7	110.7	100.9	90.4	103.3	103.6	102.3	105.0	104.7	100.1	110.7	106.1	106.6	105.5	107.4	109.4	106.7	105.8	100.6	103.1	95.0	108.8	99.8	108.3	97.6	101.6	106.7	92.8	82.1	99.2	93.2	116.2	
前年同 月比	111.0	111.4	99.1	98.0	119.0	116.0	105.3	97.4	92.9	104.6	115.4	113.6	114.2	131.2	146.6	152.2	145.0	154.3	186.9	193.0	197.3	194.1	190.6	172.9	188.0	169.5	172.9	158.3	152.4	151.4	128.4	98.8	92.7	85.8	96.7	

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出

2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和5年2月の国内の加工食品の消費者物価指数は98.6～163.9（前年同月比で－1.3%～27.6%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省）
（令和4年9月～令和5年2月）

	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R4					R5		
品目	平均	平均	平均	平均	平均	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	100.2	101.1	100.0	99.2	110.3	114.4	113.8	113.7	114.2	114.1	115.0	115.0	7.4%
即席めん	95.3	98.5	100.0	100.1	107.6	114.9	112.4	112.3	114.2	111.6	113.1	114.6	13.6%
豆腐	98.8	99.1	100.0	101.3	105.3	105.1	106.7	108.3	109.1	109.9	110.3	110.4	8.1%
食用油 (キャノーラ油)	101.5	100.9	100.0	106.9	144.4	150.4	156.8	160.2	162.7	162.5	164.0	163.9	27.6%
みそ	97.4	99.1	100.0	99.3	101.3	100.1	103.4	103.6	104.9	104.4	104.5	105.9	7.0%
マヨネーズ	100.8	100.7	100.0	105.6	125.6	126.5	127.0	133.7	136.1	137.4	137.3	137.2	21.1%
チーズ	100.9	101.3	100.0	98.7	107.5	106.6	113.2	117.1	118.6	117.5	119.2	121.4	21.1%
バター	99.5	99.9	100.0	99.9	99.2	99.4	98.7	98.8	98.5	98.7	98.6	98.6	-1.3%
生鮮食品を 除く食料	97.9	99.0	100.0	100.2	104.1	104.2	105.0	106.7	107.9	108.3	108.7	109.4	7.8%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】

食品価格動向調査（農林水産省）
（令和4年9月～令和5年3月）

	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R4				R5				
品目	平均	平均	平均	平均	平均	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	97.9	101.3	100.0	98.6	107.8	110.7	110.9	111.3	112.2	111.5	110.7	111.3	0.5%	6.4%
即席めん	92.4	97.9	100.0	99.2	105.6	110.0	110.0	110.6	110.6	111.2	111.2	110.6	-0.5%	11.7%
豆腐	100.1	100.9	100.0	100.6	103.7	104.2	107.2	107.2	107.6	108.5	108.1	110.2	1.9%	8.0%
食用油 (キャノーラ油)	97.9	103.5	100.0	104.1	140.7	156.8	160.6	161.2	161.2	162.2	162.2	161.9	-0.2%	28.1%
みそ	96.6	100.4	100.0	99.2	100.1	101.7	102.5	102.7	102.7	102.3	103.4	103.6	0.2%	5.3%
マヨネーズ	97.9	103.1	100.0	102.2	117.7	116.9	126.2	128.9	128.3	129.6	128.9	130.3	1.1%	16.2%
チーズ	98.6	100.9	100.0	98.1	105.7	108.0	114.4	115.4	110.9	116.9	118.4	117.9	-0.4%	19.6%
バター	99.0	99.5	100.0	99.8	99.1	98.6	98.6	98.6	98.6	98.6	98.6	98.4	-0.2%	-1.3%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

○独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）

○2022年4月号（3月24日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）22年の牛肉輸出量は過去最高を記録

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002659.html

（豪州）22年のと畜頭数は低水準も、23年の牛肉輸出量は増加の兆し

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002660.html

（アルゼンチン）22年の牛肉輸出量、輸出額ともに増加

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002661.html

◆豚肉

（米国）22年の豚肉輸出量、前年をかなりの程度下回る

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002662.html

（EU）豚飼養頭数の減少により豚枝肉価格が大幅上昇

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002663.html

（中国）11月中旬に下落に転じた豚肉価格、急速に値を下げる

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002664.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆鶏肉

（米国）23年1月の鶏肉生産量は増加傾向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002665.html

（ブラジル）22年の鶏肉輸出量は2年連続で増加

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002666.html

（中国）22年の家きん肉生産量は増加、価格は22年末以降下落

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002667.html

◆牛乳・乳製品

（EU）22年の生乳出荷量は前年並み、飼養頭数は前年割れ

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002668.html

（豪州）生乳生産量、30年ぶりの800万キロリットル台割れの懸念

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002669.html

（NZ）GDT価格、バターおよびチーズが続伸

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002670.html

◆飼料穀物

（世界）ブラジルが米国を抜いて最大の輸出国、期末在庫は前月に続き3億トンを下回る

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002671.html

（世界）ブラジルなどの増産で、世界の大豆期末在庫は1億トン台を維持

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002672.html

（米国）米国の輸出量は前月に引き続き前年度比22.1%減と大幅に減少する見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002673.html

（中国）国産トウモロコシ価格、需要増から高値安定での推移を予想

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002674.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2023.3)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等